



裏表紙

表紙

書名： 平成16年 秋季企画展

富士見の村絵図

—描かれた村のすがた—

出版年月： 2004(平成16).9

著者： 富士見市立難波田城資料館

本サイズ： A4サイズ(210×297mm)

ページ数： 24P

※当企画展の図録は難波田城資料館で販売（在庫の場合）

なか見！検索 コンテンツ：

- ・開催にあたって
- ・目次
- ・口絵（1ページ抜粋）
- ・1 村絵図の世界（1ページ抜粋）
- ・2 台地の村 —鶴馬村—（1ページ抜粋）
- ・3 低地の村 —大久保村—（1ページ抜粋）

開催にあたって

富士見市域には、明治時代の初めまでは8つの村がありました。市域西部の台地上にある鶴瀬・水谷地区には4つの村があり、川越街道や江戸道、また近隣の村々に通じる河岸道が縦横に走り、人や物の往来が盛んでした。一方、東部の低地に位置する南畑地区にも4つの村があり、荒川と新河岸川にはさまれた自然豊かな水田地帯が広がる景観を呈していました。

これらの対照的な立地条件をもつ村々は、当時の村絵図にもその特徴がよく描かれています。鶴瀬・水谷地区の村々の絵図からは、畑や林、寺社や人家が点在するなかを小川が縫って流れる典型的な台地上の農村の姿が浮かんできます。また、堤防や道に囲まれた南畑地区の村々では用水や排水に苦慮し、隣村との境道の高低をめぐる訴訟関係の絵図や、洪水の被害状況を示す絵図などが多く見られます。

今回の企画展では江戸時代から明治時代の初期に描かれた市内旧村の村絵図を一堂に展示し、絵図から当時の村のようすを読み解いたり、その後の地域の移り変わりを知っていただく機会としました。あわせて、明治維新後帰農して市内に移り住んだ川越藩軍学者井山氏の関係資料および同家に伝わる城の縄張絵図や、毛呂山町川角区所有の測量道具など、絵図に関連する資料も展示しました。富士見市の地理や歴史を学ぶうえで、また富士見市への理解を深めていただくうえで参考になれば幸いです。

最後に、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の提供を賜りました所蔵者、ご協力をいただきました多くの方々へ心より厚く感謝を申し上げます。

平成16年9月25日

富士見市立難波田城資料館

目次

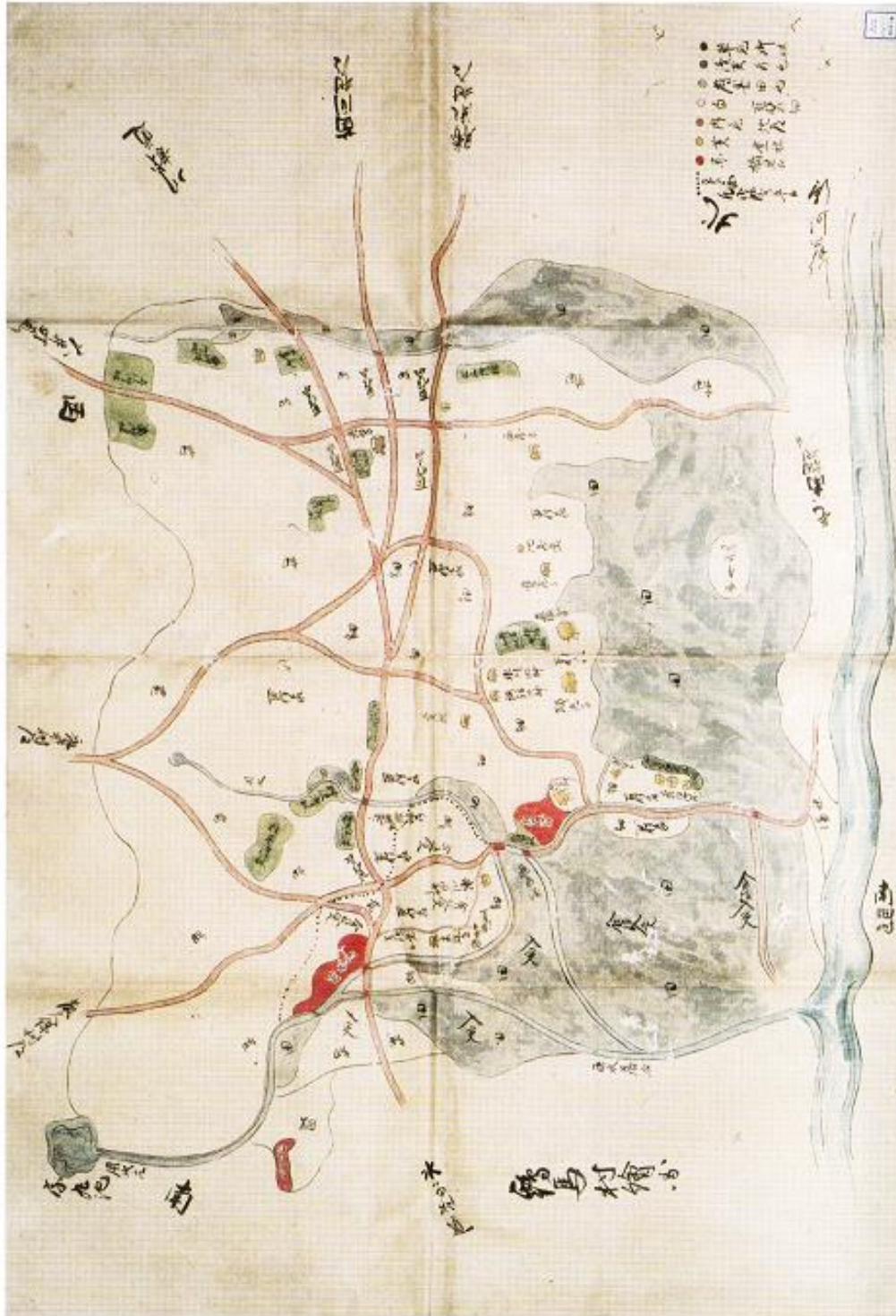
□ 絵	1～4
1 村絵図の世界	5～6
2 台地の村 ー鶴馬村ー	7～10
3 低地の村 ー大久保村ー	11～13
4 絵図から地図へ ー江戸から明治へー	14～15
5 軍学者井山家	16～20
6 明治期の村絵図	21～23
資料目録	24

凡例

- 1 本図録は、富士見市立難波田城資料館が、平成16年9月25日より同年11月28日まで開催する平成16年秋季企画展「富士見の村絵図ー描かれた村のすがたー」の図録である。
- 2 本図録に掲載した資料のうち、一部展示していないものがある。また図録の構成上、実際の展示と資料の配置とは異なる箇所がある。
- 3 本企画展の企画・構成および本図録の構成は、富士見市立難波田城資料館学芸員の会田明と同館嘱託職員宮原一郎が担当した。

この項目内から、その1ページ抜粋

▼2 (天保7~14年) (1836~43) (鶴馬村絵図) *詳細は10頁参照



この絵図に年号はないが、濃い朱色で描かれた見取畑みとりはたの開発が天保7年以降で、かつ下鶴馬分が川越藩領に編入されずまだ山形藩領であることから、天保7~14年に作成されたと考えられる。横田正志家文書近世955

この項目内から、その1ページ抜粋

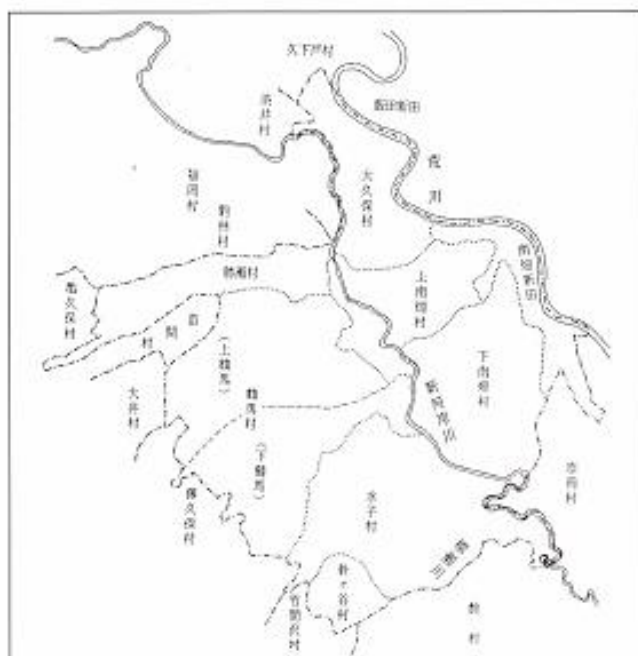
日本において人々が絵図によって自分の住んでいる地域や村を描きはじめたのは8世紀の奈良時代でした。しかしそれが一般に普及するには、多くの人が文字を使うようになる江戸時代まで待たなければなりません。

江戸時代、幕府により国絵図(6の絵図)が作成され、戦国期を経て生まれた統一政権により日本史上はじめて絵図による国土の把握が行われました。しかし、人々が住む村や町は構内のなかに地名が記されるだけで、地形や集落・耕地のようすはわかりませんでした。そのため村を支配する領主は、村のようすを記した書類(村明細帳)や村自体を描いた絵図の作成をもとめました。これが村絵図の始まりです。現在富士見市域に残された村絵図の多くは、領主の求めに応じて村が作成し提出した控えや写しです。

今回の企画展では、このような村絵図を素材に、村のようすを読み解き、あわせて鶴馬村・大久保村という台地と低地の村を例に、富士見市域の特徴を見ていきます。

▶ 5 富士見市域図

富士見市域には、江戸時代の村が8ヶ村あり、その位置を点線で示した。武蔵野台地上には勝瀬・鶴馬・水子・針ヶ谷村が、荒川沿いの低地には大久保・上南畑・下南畑・南畑新田の各村があった。

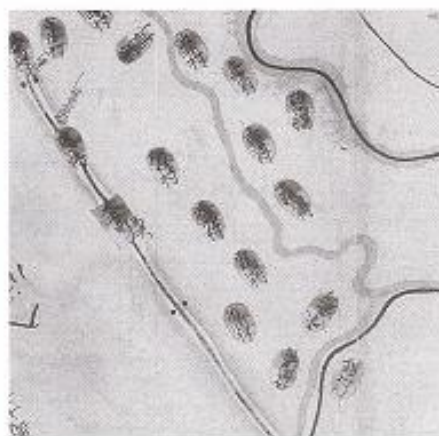
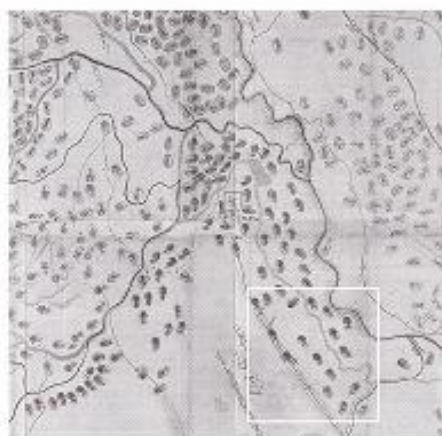


▼ 6 (正保2年(1645))

(武蔵国国絵図部分)

武蔵国(今の埼玉県・東京都・神奈川県の一部)の村名とその位置を小判型で示した絵図で、幕府により作成された。郡ごとに色分けされ、城・街道・川・山・関所なども描かれている。

独立行政法人国立公文書館所蔵
(写真は小川町教育委員会所蔵のものを使用)

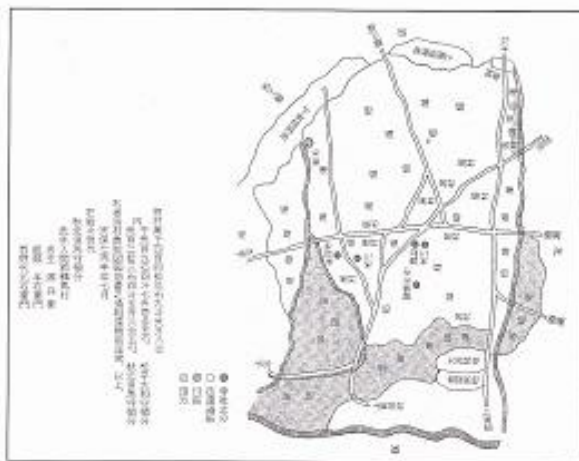
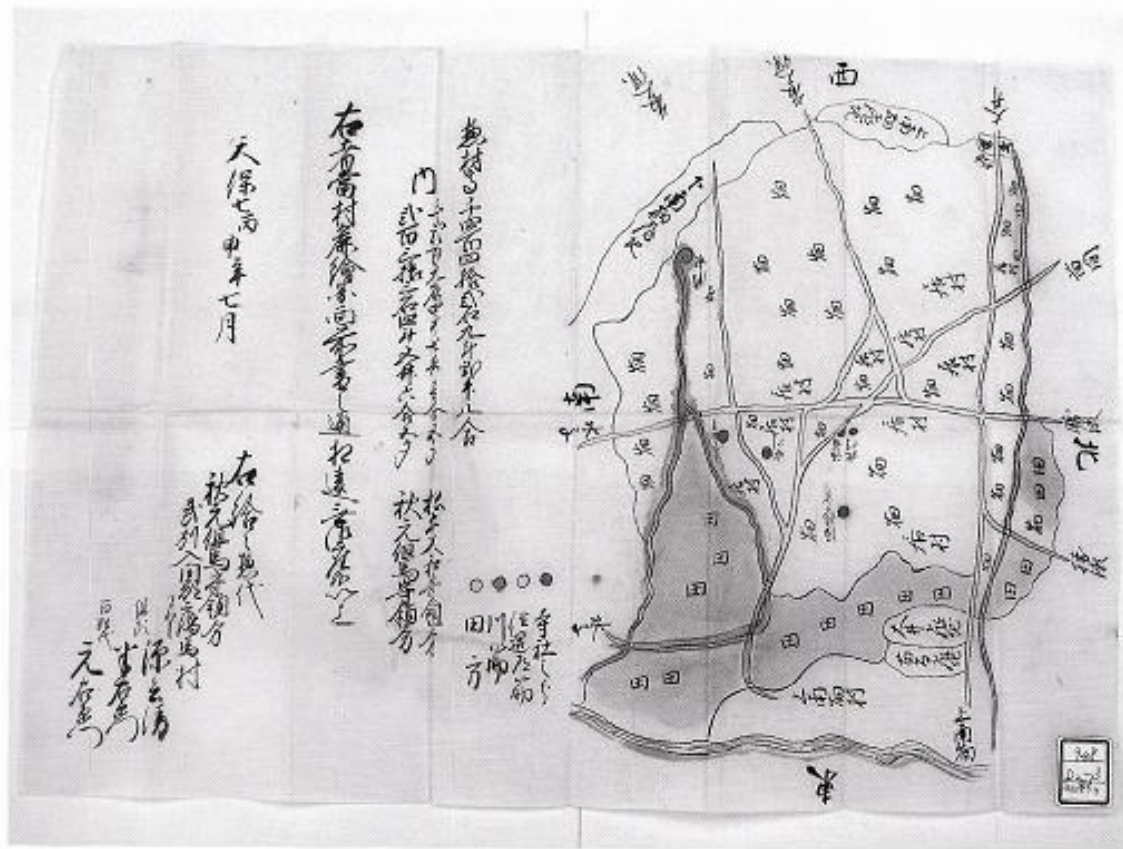


◀ 7 (正保2年(1645))

(武蔵国国絵図部分)

6の絵図の富士見市域部分を拡大したもの。現在の「下南畑」でなく、村名を変える前の「下難畑」とある。

この項目内から、その1ページ抜粋



▲14 天保7年(1836)7月(鶴馬村絵図トレース図)
13のトレース図

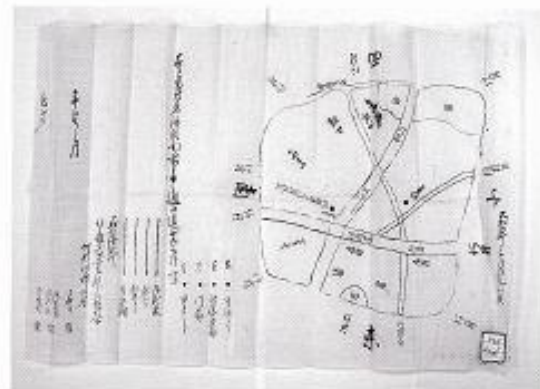
▶15 (天保7年(1836)ころ)(村絵図雛形)
天保7年幕府は元禄期(1700年ころ)に作成した国絵図を改訂するため、各村から村絵図を集めた。この絵図は、その村絵図の記載例として渡されたものと考えられる。

横田正志家文書近世948

▲13 天保7年(1836)7月(鶴馬村絵図)

下の川は新河岸川。色は茶色になっているが、青色が変色したと考えられる。田畑や道・寺社の様子のみを示した簡素な村絵図。下南畑村や苗間村の飛地も描かれている。

横田正志家文書近世948



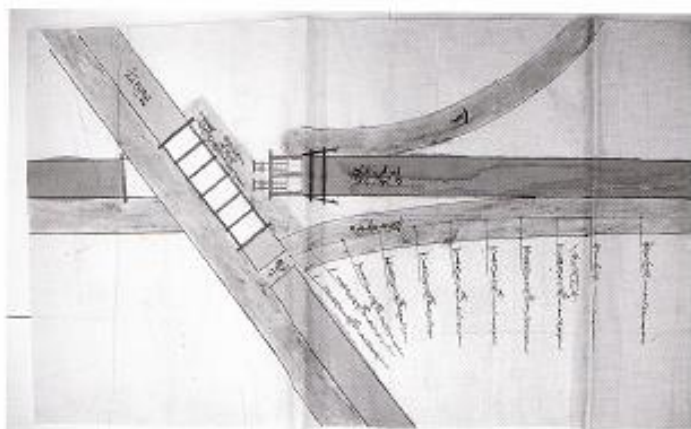
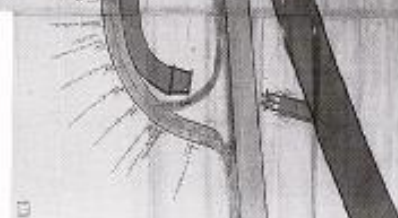
3 低地の村 —大久保村—11~13

この項目内から、その1ページ抜粋



▲22-1 (嘉永6年(1853)ころ)
(大久保村境金子道杭打絵図)

濃い茶色が「悪水吐」などの排水路で、薄い茶色が道を指す。悪水は「大団堤」(堤防)の下を通り荒川へ流れた。道の真ん中にある赤い点は杭を指し、杭から杭までの距離が書かれてある。この杭は堤防でもある金子道の高さを変えないよう設置された。
大澤家文書近世301



◀22-2 (嘉永6年(1853)ころ)
(大久保村境金子道杭打絵図部分)

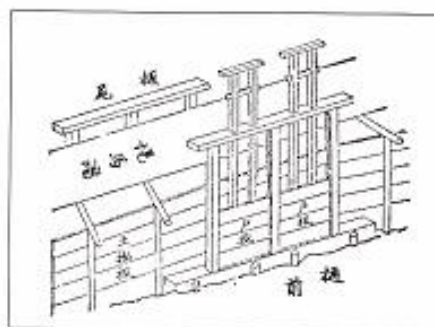
22-1の水路の交差部分を拡大したもの。左上から斜めに走る二間堀用水の下を、左から右へ悪水堀が流れている。特に「悪水吐」の水門部分が詳細に描かれている。

大澤家文書近世301

▶23 水門戸板の図

図のような戸板が、絵図20-1の荒川の堤防と、20-2の「悪水吐」と二間堀用水の交差する部分にあった。

出典「算法地方大成」
(近藤出版社)



▼24 水路現況写真

24-1 「悪水吐」 (現中郷排水路)



24-2 「悪水吐」と古南用水の立体交差部分

